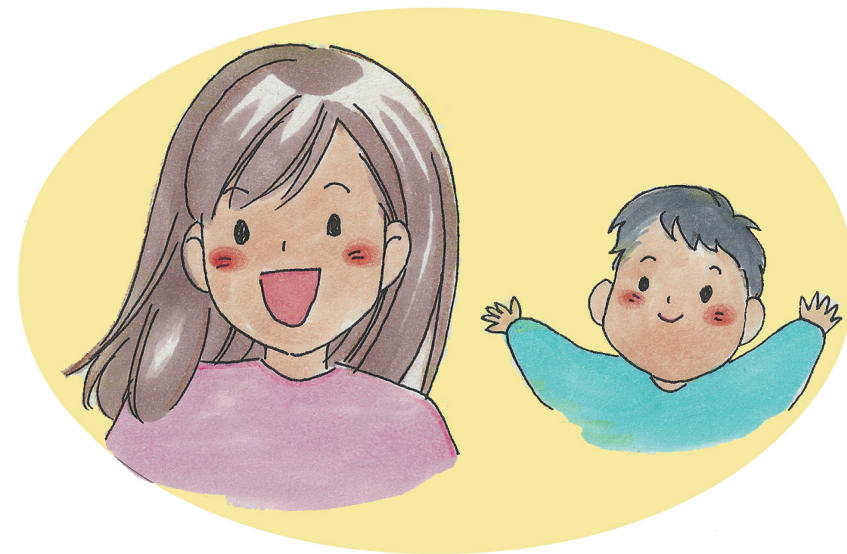




発行：社会福祉法人 豊中市社会福祉協議会



いつか必ず...

～福島から避難してきたお母さんのお話～

●文：あいはら なな
●絵：いたに ひろな



3月11日（金）春を感じさせるようなおだやかな日。

午後1時40分。ここは、にこにこ園のちゅうりっぷ組。

「来週の金曜日は修了式です。土曜日、日曜日けがをせず元気にきてくださいね！先生さようなら！みなさんさようなら！！また来週！！！」

あいさつを終えると、元気に子どもたちは帰っていきました。

延長保育の子どもたちは、お昼寝をするために遊戯室へいきました。



ゴーッ！！ゴゴゴゴ……

今までに聞いたことのないゴーッという音がすると同時に、
立ってられない位の地震がきました。

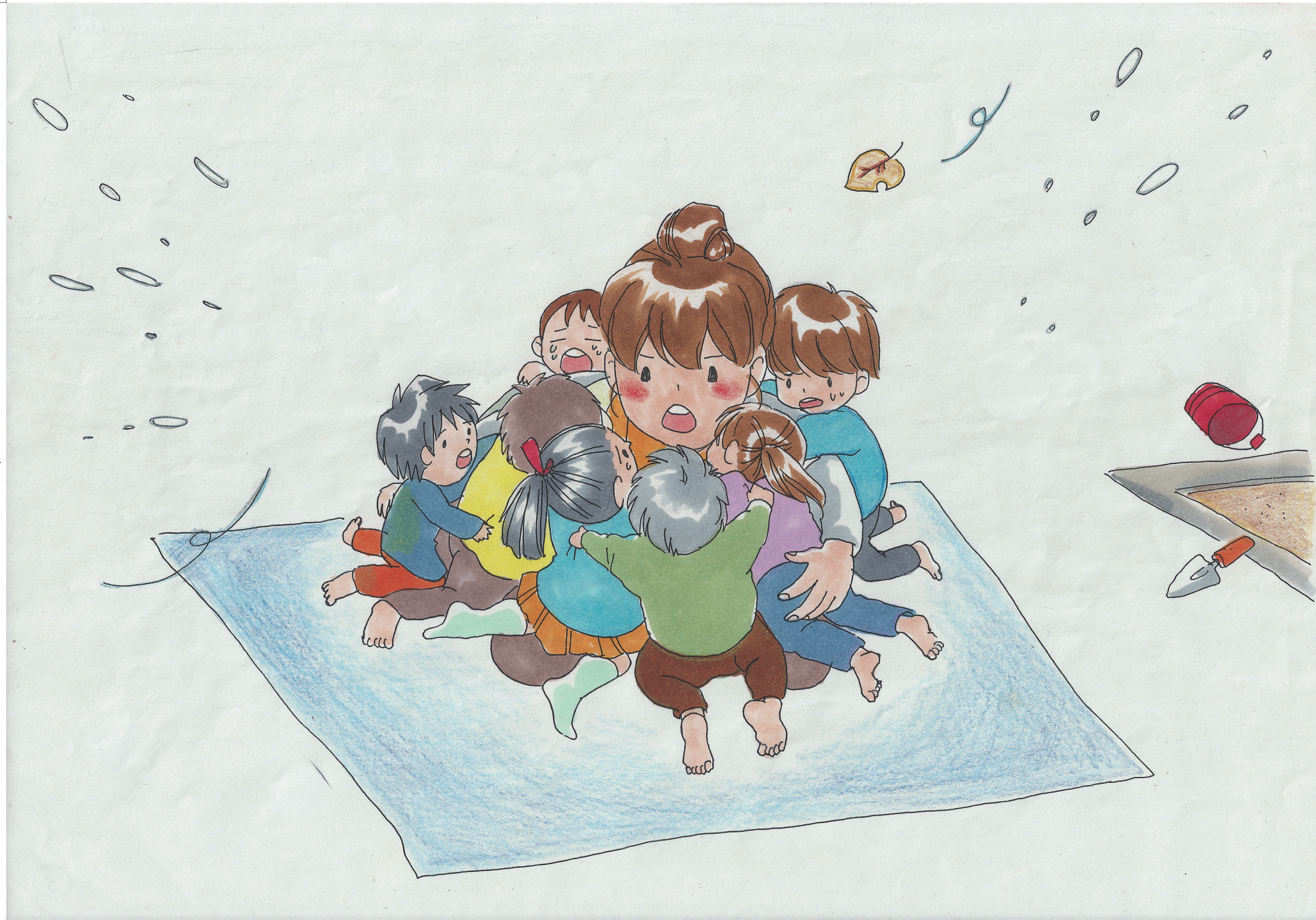
先生たちは、大急ぎでお昼寝している子どもたちのところへ走りました。

「さとしくん、地震だから起きて！」「しょうちゃん大丈夫だからね…」

「まだ揺れているから、お布団の中に入れてね。」

その時天井がミシミシと鳴り、上を見上げると

今にも崩れてしまいそうなので、急いで園庭に避難しました。



えんてい で ゆ 園庭に出ても、揺れはおさまらず、ますます大きくなってきました。
さっきまでは良い天気だったのが一変。

あたりが暗くなったかと思うと
かぜ ふ ゆき ふ そら おも 風が吹き、雪が降り、空はみるみる荒れてきました。

「じゅんくん、まさちゃん大丈夫だから泣かないでね。
せんせい まも 先生が守ってあげるからね！！」



おじいちゃん、おばあちゃん、そしてお父さん、お母さんが
 あわててお迎えにくる子もいました。
 お母さんの顔をみると、かずちゃんは抱きつき、こらえていた涙があふれ
 出ました。



ゆれが少し落ち着いてきたので、
 遊戯室に入りお迎えを待つことになりました。

テレビをつけると、大津波警報が発令されていて、
 画面には大きな波とともに車や家が流されていました。



きょうしつ えほんだな たお いす つくえ たお
 教室は、絵本棚が倒れ、椅子や机がぐちゃぐちゃに倒れていました。
 そして、みんなが大切にしていた金魚の水槽も
 ゆか お わ
 床に落ちて割れていました。



しょくいんしつ えんちょうせんせい ぼうさい じょうきょう かくにん
職員室では園長先生が、防災ネットをみて状況を確認していました。
そして「実家が流された。家族と連絡がつかない。」
ちい こえ
小さな声でひとりつぶやきました。

えんちょうせんせい うみ ちか す せんせい よ
園長先生は、海の近くに住むちあき先生を呼んで、
「ちあき先生、早く帰りなさい。あなたの子どもたちも不安がっているから」
い
と言いました。



にちようび ようちえん しょうがっこう ひなんじょ
日曜日、幼稚園のとなりの小学校は避難所になりました。

い なんびやくにん ひと ひなん
行ってみると、そこには、何百人もの人たちが、避難していました。

し き ひと き み き ひなん
仕切りもなく、ほとんどの人が着の身着のままで避難してきました。

た もの みず ようふく ふそく げんき
食べ物や水、洋服などが不足していましたが、みんな元気でした。

ひなん こ うんどうじょう はし まわ あそ
避難してきた子どもたちは、運動場で走り回って遊んでいます。

とき あと たいへん お そうぞう
その時は、この後、大変なことが起きるなんてだれも想像できませんでした。

つぎ ひ げんしりょくはつでんじょ おお じ こ
次の日、原子力発電所で大きな事故がありました。

おも じたい ひと ひなんじょ いどう
思いもよらない事態に、たくさんの人たちは、また避難所を移動しなければなりませんでした。



今回の東日本大震災では、お父さん、お母さんそしてきょうだい、おじいちゃん、おばあちゃんを津波で亡くした子どもたちがたくさんいます。

そして、大好きだった従兄弟や、全国各地に避難して離ればなれになってしまった友だちに会えなくなる淋しさを胸に抱えています。

ふるさとに残されたのは人のいなくなった街・・・

そんな中、不安になりながらも福島で頑張っている子どもたちがたくさんいます。

福島から避難してきている子どもたちは

心のどこかで“福島に帰りたい・・・”と願っています。

放射能の影響さえなければ・・・。

“いつか必ず・・・”



おおつなみ ^{なが} 大津波で流されてしまった草花^{くさばな}たちは、
 いま、^{やさ}優しく、^{うつく}美しく^さ咲き^{ほこ}誇っています。
 わたし ^{にんげん} 私たち人間も、^{つよ}強く、たくましく、
^{がれき}瓦礫^{なか}の中に^さ咲く^{はな}あの花のように、^い生きたい。
^い生きなければいけない・・・
^な亡^{ひと}くなった人たちの^{ぶん}分も・・・
^い生きてゆかなければならない・・・
^{おな}同じ^{くる}苦しみを^く繰り返さないように・・・
^{かえ}

ひがしに^{ほんだいしんさい} 東日本大震災^{わす}を忘れてはいけない。

おわりに

東日本大震災から、2年9ヵ月。被災地では、今もなお、多くの不安を抱えながら生活されている人たちがたくさんおられます。

豊中市社会福祉協議会は、阪神淡路大震災の経験から、このたびの東日本大震災発生直後から、街頭募金や救援物資の送付、ボランティアバスの運行、被災地への職員派遣、そして被災者の経験を学び、物産展の開催など被災地に思いを寄せ、継続的な支援を続けてきました。

また、被災地から避難してきた人たちを孤立させたくないという強い想いで、個別訪問や生活相談、被災者家族交流会の開催などを続けてきました。長引く避難生活で、母子避難をされている人たちの家族問題、就職支援、住宅問題、健康問題、学校や保育所の問題など、抱える課題は多岐にわたります。これらの思いを時代を担う子どもたちに伝えるために、このたび、絵本を作成することになりました。

この絵本は、豊中に避難してこられた福島県の方が体験を文章にまとめ、豊中のボランティアの方に絵を描いていただきました。

故郷を離れて生活をしている被災者・避難者に思いをお伝えする一助になれば幸いです。

いつか必ず・・・その日まで、ずっとずっと支援していきたいと考えています。

社会福祉法人 豊中市社会福祉協議会

※この冊子は、「とよなかローズ基金」の一部を活用して作成いたしました。

発行 2013年12月
社会福祉法人 豊中市社会福祉協議会
大阪府豊中市岡上の町2-1-15
（豊中市すこやかプラザ内）
TEL:06-6848-1279
FAX:06-6841-2388

●文：あいはら なな ●絵：いたに ひろな